

〈書評〉

池 見 澄 隆 著

中世の精神世界——死と救済——

佐 藤 弘 夫

1

本書は「あとがき」にもあるように、処女論文も含め過去十三年間にわたって著わされてきた池見氏の論稿を集成したものである。但し、論文集という形式をとりながらも、本書に収録された諸論文は、すべて共通の問題意識と独自の視角を背景として密接に関係づけられている。

それではその問題意識とは何か。池見氏は「プロローグ」において次のように述べておられる。

今日、仏教者の主要な業務は葬式法要であり、そのため現代仏教はしばしばマイナスの評価を含めて「葬式仏教」のレッテルが張られている。こうした状況の中で池見氏は、大学で教鞭をとる学者として、また一寺を預る住職として、自らが大学で講義する仏教の救済理念と現実の寺院のあり方との間に、大きなギャップを感じざるをえないことを率直に告白される。そして、そのジレンマをいかに

して乗り越えるかが自己の課題であり、本書はそうした問題意識をもとにまとめたものであるとされるのである。

池見氏はこのジレンマに対し主観的な立場から早急に結論を出そうとすることなく、ひとたび「葬式仏教」成立の原点である中世へと立ち返った。そして、そこにおける葬送と救済のあり方を実証的に解明した後、それをふまえて今日の仏教のあり方を改めて考え直すそうとされるのである。

すなわち、池見氏は西川知雄氏の説を借りて、仏教思想の展開を「さとり」の仏教から「すくい」の仏教への転換として捉え、日本ではその転換が十世紀半ばに開始されたとする。しかるに、十世紀は浄土教が天台仏教から自立することによって、日本仏教がようやく日本化と民衆化の動きを示し始める時期であり、また仏教者が葬送に主体的に関わり始めた時でもあった。池見氏は今日の「葬式仏教」の機能を考える前提として、十世紀に開始されるこの転換に着目する。そして、その転換の過程とそこにおける救済と葬送との関

係を明らかにすることによって、「死をめぐる日本人の心情や態度」が形成される上で、仏教、特に浄土教がどのような役割を果たしたかを解明しようとするのである。

その際注目すべきことは、そうした考察を進めるにあたって池見氏が、救済論の教理的展開や葬送儀礼の歴史の変遷を辿るという方法をとることなく、そのより根底にある日本人の生死観の変容に着目された点であろう。池見氏は本文中において、説明のためしばしば思弁レベルの表層を頂点とし生活レベルの基層を底辺とする二等辺三角形を用いられるが、それは高度に体系化された思想にとどまらず、頂点と底辺の中間領域に形成される時代思潮を把握することを重視されたからに他ならない。

これまでも日本人の生死観については多くの研究が蓄積されてきた。そうした研究がややもすれば頂点的思想、なかなか仏教思想の系譜を辿ることに終始しがちであったのに対し、池見氏は右のごとき視座をとることによって、仏教史という分野を越えて、これまで教義的視角から見落とされてきたところの、民衆の心情までを含めた「中世の精神世界」の解明に、かなりの程度成功しているように思われる。

以下、上記の諸点に留意しながら、若干のコメントを付しつつ本書の具体的な内容紹介とその検討を行なうことにしたい。

2

本書は「Ⅰ、他者の死」「Ⅱ、自己の死」「Ⅲ、もうひとつの信仰」の三部から構成されている。

第一部第1章「不浄の軌跡——精神的考察」は著者の処女論文である。この論文は池見氏自身、「本書の全篇をつらぬき方向づける問題意識が、すでにみぎの旧作に打ちだされていた」と述べておられるように、本書を理解するための鍵となるものであり、特に詳しく検討することにした。

本章において池見氏は、古来日本人が反価値の中心に据えてきたところの死を忌み嫌う不浄という価値意識に対し、死からの解脱を説く仏教、特に往生を欣求する浄土教がどのように関わっていたかを明らかにしようとする。

この問題について池見氏は、まず「不浄」と浄土教との関わり方を二つに分け、ネガティブな側面では葬送—死を連想させる念仏が「不浄」文化から忌まれていったことを述べる。しかし、念仏の説く仏教的罪業観は、他方では忌むべき「不浄」と習合することによって脱「不浄」化を推し進め、日本人の「ツミ」意識を深化させていった。そしてそのことによって、「死—不浄—忌」から「死—輪廻—厭」という思潮の転換を促し、最終的には死の忌避を超えた「無常観」の世界へと人々を導いていったとされるのである。

「浄—不浄」の観念を軸として日本独自の価値意識を論じた研究は数多いが、それと仏教思想との関わり方を本格的に追求した論稿は管見による限りこれが初めてである。しかも、両者の交渉を教理的次元にとどめず、法語・談義本・説話史料を縦横に駆使して時代一般の思潮にまで立ち入って明らかにしようとする手法は、先にも述べたように池見氏独自のものであり、その点において本稿はこの

問題に関する研究の水準を拓いたものといふことができよう。但し、池見氏は十四世紀に入って強まる無常への指向が、村落共同体規制が強まってくる社会への逆対応を示しているとされるが、一般的には十四世紀は無常や通世が否定されてゆくところの現実回帰の時期とされており、そうした通説的見解をどのように捉えるかを示してはしなかった。

第2章「禁忌と念仏——中世民衆の意識動向」は、第1章で示した念仏と△不浄▽とのポジティブな関わり方を神祇信仰と念仏との関係にしばって敷衍したものである。

中世において、専修念仏の徒がしばしば神祇不拝の態度をとったことは周知の事実である。池見氏は、平安期の往生伝の段階では清浄往生が理想とされていたのに対し、十二世紀に入って専修念仏の徒が「浄不浄を選ばず」と説き、また神祇不拝を実践することによって不浄禁忌に抵抗した結果、禁忌を否定する役割を果たしたことを指摘する。しかし池見氏は、法然以降「神祇不拝」を標榜するグループが迫害をうけて、念仏教団内においても孤立化してゆくという事実をどのように解釈されるのであろうか。

第3章「卑賤観念と仏教——横井清氏の所説・検討」では、1・2章での結論をふまえ、仏教が中世において卑賤観念の肥大と差別の拡大を助長したとする横井清氏の説に、正面から批判を加えている。

従来の研究が種々雑多な卑賤観念を十分に区別し対象化していない点をまず指摘した池見氏は、古来の触穢思想が特定他者を不浄視してこれを感じ的に忌避したのに対し、仏教——浄土教の場合は自己を通して普通の人間の根源的存在を不浄視して、それを自覺的に凝

視するものであると述べる。それ故、触穢思想が差別を温存し増幅する機能を果たしたのに対し、自己の根源的不浄性を自覺すべきことを説く浄土教は、逆に特定他者への差別的偏見をのりこえる役割を担ったのである。

平安期における浄土信仰の拡大とその担い手である聖の活動は、これまでも多数の研究者によって注目され、民衆仏教＝新仏教の源流として高い評価をうけてきた。それに対し、聖によって説かれた浄土思想が、「凡夫大衆」までも浸し尽すことによって社会全体に触穢——禁忌の観念を定着させ、当時における差別思想の増幅に寄与したことを論じ、民衆仏教の先駆者といった形で従来の一面的な聖観に厳しい批判を投げかけたのが横井氏であった。

この横井氏の所説は伝統的な仏教研究のあり方に対し、きわめて重要な問題提起を行なっていたため、関連分野の研究者に大きな衝撃を与えた。だがそれにもかかわらず、激しい議論が呼び起されるには至らなかった。そうした中で、横井氏に対する唯一ともいえるべき本格的な反論が、この池見氏の論文なのである。

池見氏の直接的な横井説批判はこの第3章であるが、第1・第2章もまた中世における禁忌や差別視の撥無に果たした浄土思想の影響を強調することで、間接的に横井説への反論となっているということができよう。これらの二つの説をどのように考えるかということでは、中世仏教研究を進めるにあたって決して避けて通ることのできない問題であり、今後他の研究者をも含めた活発な議論が展開されることを期待したい。

付1「悪人往生・再考」は、悪人往生を不浄人往生という角度か

ら捉え直した、短編ながら興味深い論稿。付2「不浄観法と忌み」は、仏教の不浄観法と日本の伝統的な「忌み」の意識との関わりをとりあげ、その変容を論じている。

3

第Ⅱ部「自己の死」では、自己の死をいかに解決するかという問題に対し、無常思想の果たした役割を考えようとする。

第1章「無常と盈虧」『徒然草』を例として「は、従来「無常観」という言葉で一括されてきた思想の中に、処世哲学ともいえるべき「盈満を忌む」（盈虧思想）という考え方と、仏教的な「無常観」という二つの異なる理念があることを『徒然草』について指摘し、兼好の思想構造をその重層性において捉えるべきことを主張される。本章における池見氏の分析の手法はまことにあざやかであり、文学を素材とする思想史的研究の一例として注目に値する。

第2章「『一言芳談』の世界」では、まず他の隠遁文学と比較しつつ、『一言芳談』の基本的性格を「後世者性」「非情緒性」「非理智性」の三つでもって捉えた。次いで『一言芳談』における〈道理〉について考察を進め、〈道理〉の中核に根ざす意志とは観念や情緒を断ち切ったところに露表する自己確立の意志であったことを指摘し、このような〈道理〉の用例は承久の乱以前の宿世的なものとは異なり、乱以後に新たに展開するものに属するとされる。〈道理〉の観念を足がかりとして、『一言芳談』を中世思想史の中に位置づけようとする意欲的な論稿である。

第3章「『死態』観と浄土教」は、死に際の生態であるところの

「死態」観に視点を置いて、生死観の形成に果たした仏教の役割を、往生伝・発心譚・軍記物の三つを素材として考えようとしたもの。

この問題を検討するにあたって池見氏は史料自体に即して「死態」観の緻密な分析を行ない、仏教の教義とそれを受容した人々の実際の「死態」観とのズレを明らかにしようとされた。その結果、中世の発心譚には臨終正念を得んがために往生を願う如き、いわば「往生の手段化」ともいえるべき立場がみられるといった、いくつかの重要な特質を剔抉することに成功している。

第4章「逆修信仰——論拠と実態」では、中世に盛行した逆修信仰をとりあげ、その目的とされる「往生ないし菩提」「延寿」「死の受容」の三つの型について、典拠である漢訳仏典とわが国での信仰の実態との落差を明らかにしようとされる。自らの死を覚悟するためのバネとしての「逆修」「死の受容」は日本独自のものであり、中世の生死観の基調ともいえるべき〈死〉そのもののなかに問題の解決をみいだそうとする態度〈と軌を一にするものであるという指摘は興味深い。

第5章「『梓弓』説話の形成——仏教とシャーマニズム」は、普遍宗教としての仏教と基層信仰たるシャーマニズムとの交渉を、逆修譚としての「梓弓」説話について検討しようとする。古来の口寄せ巫俗が習俗としてさきにあり、そこでの呪具ないし象徴たる「梓弓」が、帰死性を説示する逆修譚に転用されたことを指摘する。

4

第三部「もうひとつの信仰」は、〈夢〉信仰と人師信仰をとり

あげ、その実体と意義を考えようとする。

第1章「八夢信仰」の軌跡」は、文芸作品等を素材として古代から中世に至る夢信仰の展開を追求したもの。池見氏は夢の觀念に、夢にみる対象を「実在」であると信受するところに成り立つ「八夢」信仰と、夢を「非実在」とみることを前提として現象世界のはかなさを比喩的に表現した、仏教的な「八夢の世」觀の二つがあるとする。そして、古代から中世への移行を後者による前者の滅亡と否定の過程として捉え、それは中世の軍記物に至ってひとつの極点に達したとする。

第2章「善導・法然をめぐる人師信仰」では、法然とその教団における善導・法然に対する人格崇拜、人師信仰の展開と、それが教団においてどのような役割を果たしたかを考察している。法然・善導をめぐる人師信仰は、その背景に弥陀が連接している故に弥陀信仰の一形態と捉えうるものであること、弥陀にとどまらず善導・法然といった特定の具体的な人格を対象に求めざるをえないところに、中世日本人の思维方法の特徴を見出すことができると述べる。

これまで中世仏教の研究は、あまりにも教理史的な側面にかたよりがちであった。池見氏は従来そうした視座からは見落とされがちなであった右の二つの信仰をとりあげ、その実体を明示することによって、これまで知られていなかった中世の宗教世界の豊饒な一面をみごとに浮き彫りにしたといえよう。こうした視点は、仏教の日本の変容を考える上でもきわめて重要であり、日本思想論・文化論の試みのひとつとしても今後大いに継承し展開させてゆく必要がある。

付1「鎌倉仏教における慈悲行と法然の救済姿勢——松野純孝氏稿を検討しつつ」は、鎌倉期に波及と定着をみた倫理的価値として「慈悲」をとりあげ、それを捉える視座として自力聖道系と他力淨土系という二つの型を設定し、従来の新・旧仏教という枠組とは異なる仕方では把握し直そうとしたものである。

5

以上、本書の概略を紹介した。本書の特色は何よりも、巨視的な立場から広い範囲の史料を駆使して中世の精神世界を再現している点に求めることができる。

従来の中世思想論は仏教、なかでもその頂点的思想家の著作を素材として論ぜられるのが常であった。それに対し池見氏の研究は、タテには万葉の時代から室町時代までを、ヨコには体系化された仏教教理から神道・文芸・伝承までを視野に含めた、非常に広範囲なものになっており、それが先に述べた如き強い問題意識と統一的な視座によって裏打ちされている。そのため本書は、「死と救済」というテーマについての個別研究の枠を越えて、これまで知られていなかった中世の精神世界の重要な一側面を明らかにすることに成功している。

池見氏の研究のいまひとつ注目すべき点は、上記のような形で時代の精神を巨視的に捉えられようとする一方、常に当時の人々の意識や精神のひだに分け入ろうとする姿勢をとっておられる点であろう。第1部に収められた諸論稿はそうした特色をよく示している。その結果、本書においては体系的教義とその受容の実態との落差が

いくつかの点において具体的に明らかにされ、外来思想の日本的受容を考えるにあつての有益な提言がなされることになった。こうした考察をふまえることによって、頂点的思想としての鎌倉仏教の歴史的位置も、新たな角度から見直すことが可能になるのではなからうか。

上記の如き本書の注目すべき独自性が生まれた背景のひとつに、第1節で触れた仏教者としての池見氏の主体的な問題意識があつたことは疑えない。しかし、他方ではその問題意識が、浄土教の果たした歴史的役割についての、ある種の評価の甘さを生み出しているようにも思われるのである。

池見氏は、十世紀から民間に浸透する浄土教が日本人を死の忌避や不浄観の拘束から解放し、自己の内なる「ツミ」を自覚させ無常の世界に眼を開かせていったとされる。だが、今日の中世史研究においては、仏教の浸透に伴う罪意識の深化が墮地獄の恐怖を生み出し、それが民衆を滅罪生善をめざしての寺院への結縁へと駆り立て、結果的には彼らを宗教領主としての寺家の支配と呪縛のもとに組み込む役割を果たしたことが明らかにされている。そうした指摘を考慮したとき、罪意識の定着をそのまま人生観・世界観の深化として評価する立場は再考の余地があるように思われる。

また、池見氏は十世紀以降の浄土教の展開を連続した一本の流れとして捉えておられるようであるが、こうした理解は妥当であろうか。平安期の聖と法然の間には思想や社会的活動のあり方の面において相当な懸隔が存在するし、法然門流についても、安心派と起行派とでは聖道観や神祇観について対照的な立場を看取しうる。これ

らの思想的立場や歴史的役割の相違についても考慮する必要があるのではなからうか。

こうした問題を含め、最近イデオロギー論としての鎌倉浄土教研究はめざましい進歩ぶりをみせている。本書を「日本仏教機能論」と規定された池見氏が、次の機会にはそれらの研究と正面から切り結んでほしいと願うのは私だけではあるまい。

以上、浅学の身もかえりみず無遠慮な感想を述べさせていただいた。礼を失した点も多々あるかと思われるが、氏の寛恕を乞う他はない。池見氏が本書で打ち出された視点をさらに展開され、今後とも刺激的な研究を発表され続けることを願いつつ稿を終えたい。

(人文書院、一九八五年、二、四〇〇円)